

日本キリスト教会大阪北教会
2016年9月18日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男
聖書 ヨハネによる福音書13章1～20節

13:01 さて過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。13:02 夕食のときであった。既に悪魔はイスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。13:03 イエスは父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、13:04 食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。13:05 それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。13:06 シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださいませんか」と言った。13:07 イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。13:08 ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。13:09 そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」13:10 イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのため、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」13:11 イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。13:12 さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。13:13 あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。13:14 ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。13:16 はっきりしておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。13:17 このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。13:18 わたしは、あなたがた皆について、こう言っているのではない。わたしは、どのような人々を選び出したか分かっている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』という聖書の言葉は実現しなければならない。13:19 事の起こる前に、今、言うしておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである。13:20 はっきりしておく。わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

《説教》『わたしはあなたがたに模範を示した』

◆今日は相当の悪天候を覚悟しておりましたが、この程度でよかったと思います。先週の水曜日の炊き出しの日もどうなるかと心配していましたが、大丈夫でした。不思議に守られていることを覚えました。しかし、先週、日曜学校の7人の子どもたちが、創立者アレキサンダー宣教師の7人の子どもたちに扮して“King of kings”を輪唱で歌いましたが、信時潔さんの取材に釧路から来られた北海道新聞の

記者・椎名さんのメールによると、「釧路はこの夏、雨が降らなかったのはたった二日だけでした」ということでした。アレキサンダー師の曾孫のジョアンナさんにとって、アレキサンダー一家の愛唱讃美歌を子どもたちがあのように歌ってくれたことはとても印象に残ったことのように思いました。私の想像ですが、信時潔さん＝吉岡潔さんも、当時、この歌をアレキサンダー一家で一緒に歌ったのではないかと思います。釧路は私も50年ほど昔、神学校4年生の時に夏期伝道に行った街です。まだ伝道所で会堂もなく教会員の家で集会をしていました。教会に当時の記録があって、椎名記者の調査によると「森田幸男神学生、1966年6月30日14時55分釧路着、8月25日迄滞在」とあるようです。2か月間の実習は日曜日の礼拝説教、水曜日の祈禱会奨励、木曜日の高校生の聖書研究会をしたようです。当時の情景が浮かんできません。半世紀前の懐かしい思い出です。今日の週報の緒報告に記しましたが、ジョアンナさんから「アレキサンダー伝の日本語版が来年中に文芸春秋から出版されることが決まりました」とのお知らせをいただきました。成田空港から離日する直前に文芸春秋から知らせが届いたのです。メールの中に、God is good!とありました。

◆今日の聖書の箇所は大分長いですから、皆さんも、ご自分でここ！と思う箇所がきつとあると思います。これは聖書自体が神の言葉、遺言的な神の言葉、イエス様の言葉と、この間も申しましたが、正に今日の箇所は行動と言葉による主イエス様の遺言と言ってもよいと思う所です。弟子たちにとっては、これは終生、脳裏に刻み付けられて忘れる事はなかったと思います。正に“King of kings, Lord of lords”であられるイエス・キリストが僕の僕となられ、仕える模範を示されたのです。誠に、「王の中の王、主の中の主」であられる御方が僕の僕になられたのです。ある注解書にこう記されていました。「当時のユダヤ人社会では、主人や客の足を洗うのは奴隷の仕事だったが、ユダヤ人の奴隷はそうする必要がなかった」と。ですから当時誰もしないこと、弟子たちの一人一人の足を洗われたのです。ですからこれは本当に驚くべき事であったのです。わたしたちは聖書の諸福音書をずーっと読んでまいりまして、イエス様が多くの、否すべての病を癒されたということは何十ぺんも聞いて来たところです。「癒す」という言葉は「仕える」という言葉ですと、何度も申して来ました。つまり、King of kings, Lord of lordsであられる主イエス・キリストが、ここで特別な模範を示されたというふうには言えちょっと違うと思うのですが、イエス様が一人、一人に接するときの姿勢は、いかなる人であろうが、その一人、一人に、神に仕えるようにお仕えになったというのが、イエス様の正に日常なのです。ですから、全ての病の癒しが起こったのです。「いやす」という言葉は「(神に)仕える」という言葉です。ですから、今日のこの箇所においてだけ、主イエス・キリストが僕の僕になられたと取るならば、それは間違いだと思えます。

◆1節、「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」とあります。口語訳では「世に居る自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された」となっています。日々のイエス様の姿勢は、「愛に生きるのだ。模範を示すのだ」という、そういう意識ではなく、主イエス様が生きられるということは、そ

の全てが「奉仕」であったということでもあります。そのような次第ですので、今日の箇所を読みながら、聖書全体に記されていることは、正に、イエス・キリストにおける神の愛の限りなさであります。ですから、新約聖書がギリシャ語で書かれた時、そのようなイエス様の姿勢を、イエス様の言動を、それを一言でピタッと表し得る言葉を見いだせなかったのです。何と表現すればよいのか、それを一言で言い表すとすれば、ということで、見出した言葉が、「アガペー」だったのです。これは「神の愛」を表わすのだと皆さんも聞いて来られたと思います。いかなる「愛」を表わす言葉も相応しくなく、結局「アガペー」という言葉を当てました。直訳すると「驚くべきもの」という意味です。これは今でこそ、「神の愛」を表わすと言われるのですが、これは説明に過ぎません。ですからイエス様に関わる聖書の記述の全ては、正に「驚くべきもの」なのです。このヨハネによる福音書ならば、3章16節ですね。「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」「これこそが福音！」とルターは言ったのです。正にルターの驚くべき発見の喜びですね。

◆19節、20節にこうあります。「19事の起こる前に、今、言っておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである。20はつきり言っておく。わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」と。この「はつきり言っていく」というのは、「アーメン。アーメン。」で、「アーメン」の繰り返しです。これは、その言葉の確約、確実性を表わしています。「わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった神を受け入れるのである」と。ですからこれは、わたしたちとイエス様との一体性が、そしてイエス様と父なる神様との一体性が、明瞭に語られているのです。また19節にこうあります。「事の起こる前に、今、言っておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである」と。「事が起こったとき」、つまりこの後、祭りの中でイエス様は捕えられて十字架につけられます。そして三日目に蘇られます。そして50日後に、聖霊として降臨なさいます。そのように展開して行きますが、そのような神様のご計画を、そのような神様のご計画の中に全てがあるということ、を自覚されているのはイエス様ただお一人です。それで事が起こった時、「『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである」と。このような神様のご計画を認識できるものは、誰一人おりません。そのような父なる神様のご計画の中にあるということ、を自覚されているのはイエス様ただお一人です。

◆「わたしはある」という表現は、神様がモーセに現われなさった時、ご自分の名前をこう知らされたのです。神様は「わたしはある。わたしはあるというものだ」と言われたのです。これは「わたしはあなたと共にいる」ということです。マタイによる福音書の最後のところで、イエス様の「わたしは世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」と言われました。これが今日の箇所の「わたしはある」＝「わたしはいる」に相当することばです。「あなたが苦しむ時もわたしはあなたと共にい

る。」先週の聖書を読む会でエフェソの信徒への手紙の最初のところを読みました。1章3節にこうあります。「私たちの主イエス・キリストの父である神はほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました」と、パウロは本当に喜びに満ち溢れて言っております。「キリストにおいて」という表現は、新共同訳では「キリストに結ばれて」と訳されてもいます。「神はわたしたちをキリストに結び付け、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。」これがイエス様を主と信じるキリスト者の現在、これが「わたしはある」という神様の自称、そしてそれはイエス様の事でもあり、つまりイエス様と神様は一つ。そしてイエス様とわたしたちは一つ。この一体性を言っておられるわけです。言い替えれば、神様のものはイエス様のものであり、イエス様のものはわたしたちのものである。そのようなことがここで言われているわけです。「神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。」これが私達キリスト者の永遠の現在なのです。

◆「13:14 ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」いずれにしても、イエス様はここで、弟子たちに模範を示されたのであります。上でも申しましたが、イスラエルの世界では画期的な、僕の洗足。イエス様はそれをなされた。わたしはイエス様の模範ということで思い出したのですが、昨日この中之島4丁目の町内会の観月会がありました。私はいただくものをいただいて早めに帰ったのですが、孝子さんは最後まで片付けも手伝って帰って来るなり、「町内会の人、みんな腰が低い。誰一人偉ばる人いないわ」と、開口一番でした。スイスの精神科医ポール・トゥルニエは言っていました。「イエスという御方は私たちの所に降りて来られて天の高みに伴って下さいます」と。わたしたちのレベルに降りて来て、私たちの歩調に合わせて目標に向かってくださると。「わたしはある。」主イエス様は私たちが何者であっても共にいまして、一切の苦難と栄光を共にしてくださるお方なのです。このキリストに結ばれて私達は霊的な一切の祝福に与っています。欠けることは何もないのです。私たちの人生に色々な事が起こります。しかし、イエス様の「わたしはある」は、何が起きても揺るがないのです。そして本当に全てを捧げて自らを無にして私たちと共にいて下さるのです。これが今日の箇所の証言であり、聖書全体の証言です。私たちはこの一事で、どんな時にも生きることができます。この様な信仰を生かされている事を感謝し、これからの日々を歩みたく思います。

◆お祈りいたします

愛に満ち給う主イエス・キリストの父なる神様

動揺し、揺れ動き、苦難に合い、不安になり、行き詰まる者でありますけれども、そのすべてをあなたが共にいまして、それを知り抜いてわたしたちを闇から光へと解放してくださいます。どうかいついかなる時もあなたが共に居ますことを信じて歩む、のような信仰を固く守らせてください。

この祈りイエス様の御名を通しみ前におささげいたします。アーメン。